アド連便り

第32号
令和5年9月1日
発行：全日本青少年育成アドバイザー連合会
編集：広報委員会

香川県健康福祉部子ども政策推進局
子ども政策課　副主幹　熊野真美様の基調提言の様子

令和5年度
総　　会
研究集会
香川県丸亀市

総会と研究集会を開催

令和5年度全日本青少年育成アドバイザー連合会の総会と研究集会が、令和5年6月10日(土)～6月11日(日)にかけて、香川県丸亀市の「ボートレースまるがめ会議室ROKU」において開催されました。総会では、会長挨拶で始まり、令和4年度事業報告(案)と決算(案)、令和5年度事業計画(案)と予算(案)が、原案通り可決承認されました。また、役員改選もあり、本年度より会長に香川勝氏、事務局長に清水成眞氏が選任されました。。来年は岩手県で開催されます。

多くのご来賓をお迎えしました。ありがとうございました。

香川県知事
青少年育成香川県民会議会長
池田　豊人　様

丸亀市長
松永　恭二　様

丸亀市教育委員会教育長
末澤　康彦　様

総会の様子
令和5年6月10日

香川県知事
池田豊人様

香川勝会長挨拶

丸亀市長
松永恭二様

来賓･講師　(左から)
丸亀市長　松永恭二様
丸亀市教育委員会教育長　松澤康彦様
講師　熊野真美様
講師　小柳晴生様

基　調　提　言

「香川県の青少年行政の取り組みについて」

提言者　香川県健康福祉部子ども政策推進局

子ども政策課　副主幹　熊野真美　様

第27回　全日本青少年育成アドバイザー連合会総会及び研究集会IN香川県
兼　中国・四国ブロック青少年育成アドバイザー連合総会・研究集会IN香川県

令和5年度子ども・若者育成支援研修会

香川県の青少年行政の取り組みについて

令和5年6月10日
香川県健康福祉部子ども政策推進局子ども政策課

青少年を取り巻く現状と課題

- 社会の変化が激しく、青少年を取り巻く現状は厳しい状況にある。
- 親子や同世代・異世代の人との交流、実体験の機会が少ない。
- 青少年の自己肯定感や社会性、社会の一員としての自覚が育ちにくい。
- 虐待の増加や不登校・高校中退、非行、ひきこもり、フリーター、ニート、ヤングケアラーなど青少年が抱える問題は多様化、複雑化し、深刻になっている。
- 青少年それぞれの問題の状況に応じた多元的・重層的な支援が必要となっている。
- 県民一人ひとりが次世代を育てる責任を自覚し、一体となって、青少年が健やかに育つ環境を整えていくことが求められている。

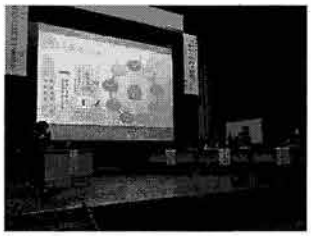
基　調　提　言

香川県の取り組みについて

●1　かがわ子ども･若者育成支援ビジョンの策定

●2　ビジョンを推進する施策について

10月　子ども･若者育成支援者研修会



1月　子ども･若者育成支援シンポジウム

1　かがわ子ども･若者育成支援ビジョンの策定

● 策定の趣旨

・H14に策定した「かがわ青少年育成ビジョン」をもとに施策を総合的に推進してきた。

・青少年に関わる新たな課題が生じ、国において、平成22年4月に「子ども･若者育成支援推進法」が施行され、同法に基づく大綱として、平成22年7月に「子ども･若者ビジョン」が策定される。

・H24に県民が一体となって健全な青少年の育成に取り組むための行動指針として「香川青少年育成支援ビジョン」を策定

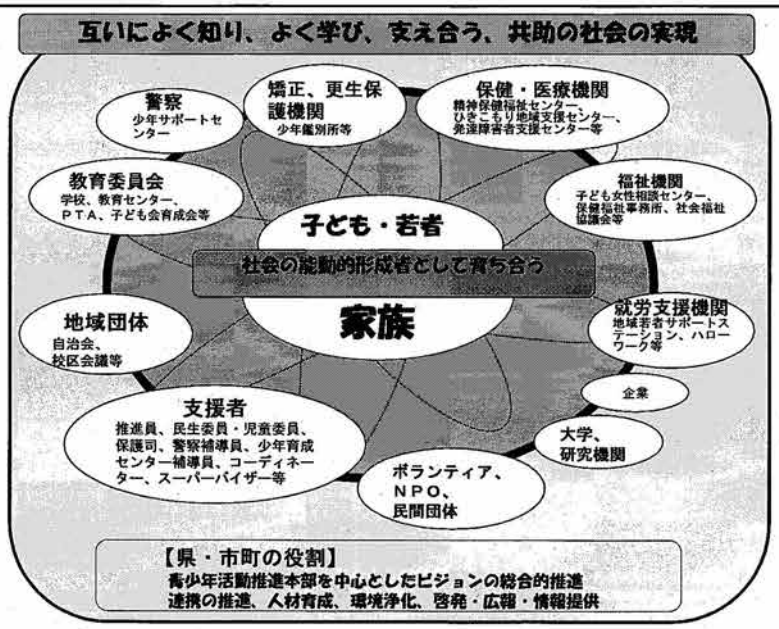
かがわ子ども・若者育成支援ビジョンについて

- 性格と役割
  県の子ども・若者育成支援の基本理念や基本方針を示す行動指針。子ども・若者育成支援推進法に基づく「都道府県子ども・若者計画」として位置づける。
- 実施時期
  平成30年度から実施し、必要に応じて適宜見直す。
- 対象とする範囲
  乳幼児期から、ポスト青少年（おおむね40歳未満）までを幅広く支援の対象とする。

基　調　提　言

2　ビジョンを推進する施策について

- (1)地域ネットワーク強化推進事業の実施
- (2)「みんなで子どもを育てる県民運動」の推進
- (3)他機関との連携推進
- (4)青少年保護活動
- (5)広報･啓発活動



基　調　提　言

（1）地域ネットワーク強化推進事業の実施

【令和4年度　講演会・研修会開催状況】

・令和4年7月15日（木）
子ども・若者育成支援地域協議会　実務者会議及び実務者研修会
講演「引きこもりの理解と支援～当事者と家族をそう支えるか～」
講師　一般社団法人　ひきこもりUX会議　林　恭子　氏

・令和4年10月31日（月）
子ども・若者育成支援者研修会
実践活動発表「地域防犯パトロール活動の実践と成果」発表者　香川大学防犯パトロール隊　様
講演「困難を抱える子ども・若者の現状とその支援」について　講師　久留米大学　教授　門田　光司　氏
情報交換会　指導・助言　アフターケア事業所わっかっか代表　合木　啓雄　氏

・令和5年1月21日（土）
子ども・若者育成支援シンポジウム
基調講演「子ども・若者の支援と地域・学校・職場の連携」
講師　名古屋大学大学院　教授　辻　浩（つじ　ゆたか）氏
シンポジウム「私たちに何ができるか」コーディネーター　辻　浩　氏
シンポジスト　・香川大学医学部小児科医　鈴木　裕子　氏
・児童養護施設「恵愛学園」施設長　朝田　真悟　氏
・香川県臨床心理士会会長　豊島　佳津子　氏

（2）みんなで子どもを育てる県民運動の推進

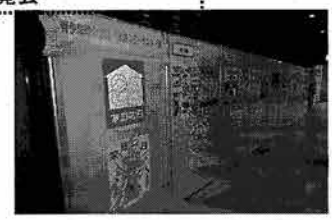
- 趣旨
  大人や子どもみんなが互いにふれあい、一人ひとりができることから始めようとする県民運動を推進する。
- 運動スローガン
  「君が好き！あなたが大事」
- 主催
  香川県、香川県教育委員会
  香川県警察本部
  青少年育成香川県民会議
  （公財）明治百年記念香川県青少年基金

基　調　提　言

事業内容

①県民運動啓発事業
- 推進大会の開催
- 県民運動キャンペーンの実施
- 実践活動優秀事例表彰
- 「みんなで子どもを育てる日」の推進
- 「家族ふれあいキャンペーン」の推進

令和4年度
「家庭の日」ポスター展覧会

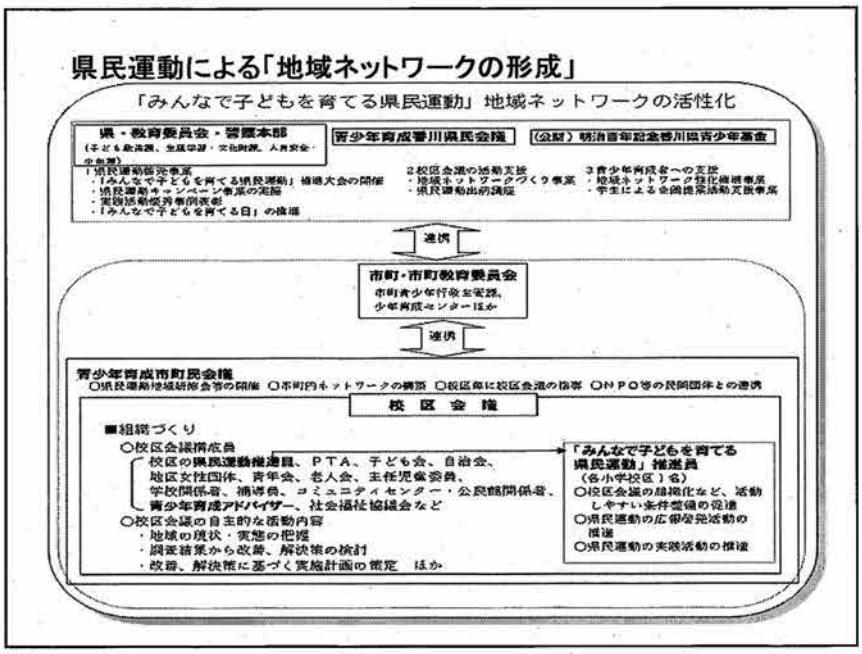


令和4年度
「みんなで子どもを育てる県民運動」推進大会

②校区会議の活動支援
- 県民運動推進員による活動
（2年ごとの委嘱替え）
- 実践活動事例表彰

③育成者への支援
- 6月　みんなで子どもを育てる県民運動推進大会
- 10月　子ども・若者育成支援者研修会
- 1月　子ども・若者育成支援シンポジウム

基　調　提　言



（3）他機関との連携推進

- 教育委員会、警察、教育センター等の担当者部会の開催

（毎月第3木曜日にワーキンググループを開催している）

- ハンドインハンドの作成

（R5年度中に改訂版発行予定）

基　調　提　言

(4)青少年育成保護活動

- 香川県青少年保護育成条例の改正
- 事業所等の立ち入り調査･指導

(5)広報･啓発活動

- リーフレット等の作成、配布
- ホームページ
  「きらきらかがわ青少年ネット」の作成

第27回 全日本青少年育成アドバイザー連合会総会及び研究集会IN香川県
兼 中国・四国ブロック青少年育成アドバイザー連合総会・研究集会IN香川県

令和5年度子ども・若者育成支援者研修会

ご清聴ありがとうございました

令和5年6月10日
香川県健康福祉部子ども政策推進局子ども政策課

（公財）明治百年記念香川県青少年基金　「夏休み・秋のイベント特集」

■ふるさと体験ツアー（小学３～６年生対象）
この事業はふるさと香川の自然・農業・歴史・伝統などを学び体験し、ふるさとをもっと知って、好きになってもらうツアーです。
◎張子の奉公さん作りコース（連続２回コース）
日時：①7/27(木)13:30～「型作り」　②8/17(木)13:30～「絵付け」(各３時間)
会場：讃岐おもちゃ美術館

◎瀬戸内の歴史を知ろうコース
日時：8/3(木)　9:00～16:00
会場：瀬戸内海歴史民俗資料館、五色台ビジターセンター

◎棚田のソバ栽培を知ろうコース
日時：9/30(土)　9:30～15:00
会場：まんのう町川東　島ヶ峰

■県内企業の魅力を知ろう（小学３～６年生対象）
この事業は県内企業を訪問見学し、地元の産業を知ってもらうことを目的としています。
日時：8/1(火)　13:30～15:30
会場：まんのう町　株式会社長峰製作所

■どきどき冒険キャンプ
柏原渓谷キャンプ村 TaTuTa の森で、楽しく体を動かしながら防災も学びましょう。
日時：8/8(火)～8/10(木)
対象：県内在住小学 4～6 年生　32 名
料金：1 万円

募集期間：6/1(木)～6/30(金)
問合せ/香川県健康福祉部子ども政策推進局子ども政策課　青少年育成グループ
TEL：087-832-3207　E-mail：kosodate@pref.kagawa.lg.jp
HP：https://meiji100kagawa.jimdofree.com/

記　念　講　演

「発達障害(しょうがい)という謎」

講師　元香川大学教育学部教授

小柳　晴生　様

（おやなぎ　はるお　さま）

＜ 講師プロフィール＞

氏　名：小柳　晴生　（おやなぎ　はるお）

現　職：フリー（元香川大学教育学部教授、保健管理センター所長、放送大学客員教授）

略　歴：１９５０年石川県生まれ。金沢大学卒業、広島大学大学院修士課程修了、広島大学及び香川大学の保健管理センターで、２０数年間学生相談カウンセラーをつとめる。２００１年より香川大学教育学部に移りカウンセリングなどの講義を担当。

　４０歳半ばを過ぎた頃から、カウンセラーをしていながら忙しさで自分を省みる余裕さえない生活に疑問を感じるようになり、２００５年に５５才で香川大学を退職。瀬戸内海が眺められる山中で、「半隠居生活」に挑戦して１８年になる。

　２００６年、日本人間性心理学会　学会賞を受賞。

著　書：三歳までの子どものこころ相談室　木立の文庫（２０２２）

大人が立ちどまらなければ　ＮＨＫ生活人新書 （２００５）

ひきこもる小さな哲学者たちへ　ＮＨＫ生活人新書 （２００２）

記　念　講　演

発達障害（しょうがい）という謎

小柳　晴生

１．発達障害の「先天的脳機能障害説」を疑う理由

「発達障害」という言葉は、２００２年の文部科学省の調査で、通常学級に通う小中学生のうちの６．３％（６８万人）が、発達障害の可能性があると発表され一躍脚光を浴びることになった。

同様の調査は２０１２年にも行なわれ、６．５％（６０万人）が、さらに２０２２年では、８．８％（８２万人＊筆者の推計値）と急激に増加している。文科省は、実際に増えているのではなく理解が深まったためと説明している。

資料１に、特別支援学級の在籍者数の経年変化のグラフを示した。平成２３年の１５．５万人から令和３年の３２．６万人と１０年間に２倍に増えている。それだけでなく、年々増加のペースが大きくなっている。

この２０年間の両者の数の変化を表１に示した。先の通常学級と合わせると、２０２２年では１１４．６万人、小中学生の１２．２％が発達障害のまたはその可能性があることになるが、先天的障害説では数の多さや急激な増加を説明できるとは思えない。

表１．通常学級の発達障害の疑いの児童生徒数と、特別支援学級の在籍者数

調　査　時　期	通常学級在籍数	特別支援学級在籍数	合　計
２００２（平成１４）年	６．３％（６８万人）	７．２万人	７５．２万人
２０１２（平成２４）年	６．５％（６０万人）	１６．４万人	７６．４万人
２０２２（令和　４）年	８．８％（８２万人）	３２．６万人	１１４．６万人

（＊特別支援学級には、他の障害も含まれるので、発達障害の疑いは、この数から１万人引かなければならない）

また、この間、普通学級に在籍し特別支援教育も利用する通級学級は、平成１０年２万４千人から令和３年では１６万４千人と２０年間に７倍に増えている。（資料２：平成３０年度から高校含む）

資料３に、２０２２年の結果を学年別に見たものを示す。小学校１年は１２．０％であったものが学年の進行につれて漸減し、中学３年では４．２％と９年間で１／３になっている。年齢が上がれば学業も人間関係も難しさが増すことを考えると増加しても不思議ではないのに、激減しているのである。この現象も先天的脳機能障害説では説明がつきにくい。

発達障害に関する著書は多数出版されている。原因論については先天的な障害の他に遺伝や環境ホルモン説など様々であっても、そのほとんどが親子関係、ことに幼少期において改善すると症状が回復するとし、そのための様々な工夫を提案している。

他の先天的疾患、例えばダウン症候群でも親子関係が良好であれば生活の質は向上するだろうが、症状そのものは好転することは考えにくい。もし、親子関係の変化で、症状が回復するとすれば、その発現に親子関係が介在していると考えるのが自然ではないだろうか。

２.「発達障害」と「愛着障害」の関係についての言及

愛着障害とは、乳幼児期に母子の間で濃厚な情緒的な結びつき、愛着がうまく形成されないために、言葉の発達が遅れたり、人との関わりやコミュニケーションが取れなかったり、自分の行動を状況に合わせて適切にコントロロールできなかったりするものである。

①　岡田尊司（2012）「発達障害と呼ばないで」幻冬舎新書

両者の関係について、直接的に言及している一人が、岡田氏である。「そもそも発達障害とは、遺伝子レベルの異常や、胎児期、出産時に起きた器質的要因などに起因する脳の発達の障害であり、ことに遺伝的要因が強いものをさす概念であった。養育要因によって起きた発達の問題は、発達障害に含めないというのが本来の定義であった。

養育の問題だけでは、発達障害のような症状を生じることはないと考えられ、万一あったとしても容易に区別できると考えられていた。しかし、現実には、症状からだけでは、両者の見分けはそれほど容易ではなく、養育などの環境要因の関与するケースが「発達障害」と診断されているのである。症状から「発達障害」として診断を受けているが、むしろ「愛着障害」と診断すべきケースがかなりあることが、一部の専門家の間でも言われるようになった。

しかし、今もなお「発達障害」という診断が圧倒的に多く使われているのが現状である。その理由として、「親が責任を感じるような診断」や「子育てへの自信を失うような事態を避けたい」ことによる。しかし、そのために方弁が真実を押しのけ、本当の問題解決からますます遠ざかることも起こりうる。

「脳機能の障害」と言う診断は、薬物療法を導入しやすい。心理社会的要因が大きいとすれば、カウンセリングや遊びをベースとした治療がメインになろうが、脳機能の障害ということで否定されてきた歴史がある。多くの患者を抱え、三か月に一回の診察も普通と言う状況では、頼りになる選択肢となる。

養育などの環境要因の重要性が明らかになったことは朗報とも言えるのだ。「発達障害」といえども、状態を大幅に改善するチャンスがあるということだ。親が関わり方を変えることで愛着が安定し、子どもが本来の発達を取り戻すからだ。それはまた予防を考えていく上でも重要である。」

２０１３年に岡田氏が高松で講演した折、「発達障害のうち、どのぐらい愛着障害か」と質問したが、「ＡＤＨＤの９割ぐらいが愛着障害では」という答えだった。

②小林隆児「愛着障碍と発達障碍」（2016）西南学園大学人間科学論集第 12 巻 1 号

愛着障碍も発達障碍もともに「関係障碍」として捉えることができるという立場をとるのが小林である。

「ここで対象となっている子どもたち（０歳、１歳段階で、自閉症ではないかと心配して受診した親子）は、母親に対して常に「甘えたくても甘えられない状態にある。本来であれば子どもは心細い状態になると母親に甘えることで不安は和らぎ安心するのだが、彼らにはそれができない。

彼らの不安は非常に強く、未知な状況に置かれたならば、不安は増強の一途を辿り、そこに悪循環が生まれる。不安が強いと刺激に敏感に反応するが、そこで知覚（とともに情動も）はより過敏になる。そのことがより不安を強める。彼らは少しでも不安を和らげよ

うとしてもがく。そうした対処行動のうち、発達障碍に発展するものとして、

1）母親に近寄ることができず、母親の顔色を気にしながらも離れて動き回る

2）母親を回避し、一人で同じことを繰り返す

3）なんでも一人でやろうとする、過度に自律的にふるまう

4）ことさら相手の嫌がることをして、相手の関心をひく　を挙げている。

発達障碍と診断されてきた子どもたちは、発達障碍あるいは自閉症だからこのような行動をとるわけではない。母親に対して「甘えたくても甘えられない」関係であったがゆえに、仕方なくこのような行動に出て、それが固定化あるいは恒常化してゆくと発達障碍あるいは自閉症と診断される状態になるのである。」

ここに描かれている子どもの姿は、「愛着障害」と考えられるものである。

③竹内慶至編（2013）「自閉症という謎に迫る」小学館新書

大井学「自閉症をめぐる５つの謎」

大井は治療効果の点から、親子関係に言及している。「アメリカで効果が実証されつつあるのは、**親子の相互作用を自然に充実させる技法、社交を中心とする小集団活動だ。**ＴＥＥＡＣＨの技法の一つ視覚的構造化自体には、本家（アメリカ）ですら効果が検証されていない。応用行動分析（ＡＢＡ）はアメリカ厚生省が唯一効果を公認している技法だが、長期予後は確認されていない。これらの他にもＳＳＴ（ソーシャルスキルトレーニング）などがもてはやされるが、どれも検証された効果はない。

④竹内願人（2012）「アンナチュラル　小説・自閉症」共栄書房

小説という形を借りて、自閉症の先天的障害説に異議を唱えているのが竹内である。竹内はペンネームで、現役の医師とのことである。

＊＊

○研究者：「自閉症は、生まれつきの障害なのですか」

○障害者団体の役員：「これは医学の常識なのですよ！私があったすべてのお医者さんが、口をそろえて言っています。」～「自閉症は生まれつきの脳の機能障害であり、それは動かすことのできない事実です」（長いやり取りの末に）

○障害者団体の役員：「自閉症の原因が不明だということは、脳に生まれつきに欠陥があるとは言えない・・しかも『親に責任はない』とも言えないことになる・・・だとしたら・・・日本の自閉症専門家の理論は破たんしている！」

この本では、自閉症をピアジェの理論を援用して親子関係から解明しようとしている。彼が伝えたかったのは、脳に起因するとする「日本の自閉症専門家の理論は破たんしている！」ことなのだろう。ペンネームで発表したように、現代の日本でこれを主張するのは、命がけであると本の中に書かれている。

⑤マスコミは「愛着障害説」を取り上げない

ＮＨＫの教育番組などで、「発達障害」を取り上げることが多くなった。その時強調されるのが、「発達障害は生まれつきの脳の機能障害（特性）であり、育て方やしつけとは一切関係がない」ということであり、これに添った主張をする研究者だけが専門家として登場す

る。「愛着障害」の「あ」の字も出てこない。ここまでくると、キャンペーンというかイデオロギーに近いものになって、言論統制に近いことが起きていると感じる。

⑥成田奈緒子（2023）「『発達障害』と間違われる子どもたち」

発達障害の激増に疑問を投げかけているのが、成田である。発達障害でない子どもたちが先天的な脳の障害と診断されているとして、発達障害と似たような状態を呈する子どもについて、新たに「発達障害もどき」という見方を提唱している。

脳は「からだの脳」・「おりこうさんの脳」・「こころの脳」の順序で発達するが、そのバランスが崩れ「からだの脳」が十分に発達していない状態が「発達障害もどき」であるとしている。

「からだの脳」を育てるのは五感（味・臭・視・触・聴覚）からの刺激であり、このために「規則正しい生活」、とりわけ十分な睡眠と早起き、食事を規則正しくとる、食器洗いなどの家庭の中で役割があることが重要としている。この他に、テレビ、スマホ、タブレットなど電子機器の多用、親子のコミュケーションの不足や叱ること多いことも「発達もどき」につながるとしている。

幼少期の育児は、「からだの脳に」が十分育った「立派な原始人にすること」としている。「発達障害もどき」は、先の規則正しい生活や「ありがとう」と「ごめんなさい」を大切にする親子関係などで、比較的短期間に改善が見られるとし、薬に頼ることに疑問を呈している。

医師が、発達障害でない子どもにレッテルを張ることに警鐘を鳴らしたのは画期的だが、いくつかの疑問が湧いてくる。

① 言葉の遅れや、コミュニケーションがうまく取れないという相談で、成田が強調しているような夜遅く寝ることが問題の中心になる子どもに会ったことがない。

② 成田は、「発達障害」は、その概念が社会に浸透してために間違って判断され増えているとしているが、そのうち「発達障害もどき」の子どもの割合や、「もどき」が増えているのかどうか、増えているとしたらその理由を明確に示していない。

③ 成田は、「発達障害もどき」は生活の改善で短期間に改善するとしているが、実際はかなり困難であることが多い。

④ 「発達障害もどき」の提唱で、教育界で20年続いた「発達障害」による混乱が、特別支援学級の在籍者が減るなど一段落するとは思えない。どのような名前で呼ばれるかに関わらず、学校や保育の現場でクラス運営を困難にし、教師の疲弊につながるような特別な配慮を必要とする子どもは増えている現状は厳然と存在していると考えている。こうした子どもの増加の理由の解明や、対応の方法の確立が急がれる。

３．発達障害と呼ばれる子どもが増えている理由
～その正体は、親子の情緒的交流がうまくできない「愛着形成不全」である～

①　親と子どもの生きる速さが、異なってきた

かつて、人間は親子ともども歩く速度で生きていた。経済の発展に伴って大量の製品や情報が生産され消費されるようになった。身体は一つしかなく、時間は１日２４時間であることは変わらない。人は、車や電化製品を活用し、生きる速度をはやめ、生活の密度を濃くす

ることで対処したのである。こうして大人の生きる速度がだんだん速くなり、今や車に例えれば時速６０キロで生きるようになった。

他方、乳幼児は生物としての人間の速度である時速４キロで生きている。時速６０キロで生きている親は、子どもの世話をする時に心のギヤを何度も切り変えなければならない。現代社会の子育ては、親は速さが異なる二つの世界を日に何十回も行き来しなければならない過酷な営みになったのである。

生きる速さが異なるために子どもが世話を求めた時、即座に対応できずいくばくかの時間のズレが生じてしまう。このために身体的には一緒にいても情緒的な交流が妨げられやすくなったのではないだろうか。これが心理的虐待（ネグレクト）の潜在的温床になっていると考えられる。

人が生きてゆくためには、自分はこの世の中にいてもよいという「存在への自信」が必要である。この自信は、子どもと過ごすときに、親が「この時間に意味ある、自分にとっても大切な時間だ」と感じており、大人が子どもの表現にゆっくり耳を傾けることで育つ。

しかし、時速６０キロで生きていると、子どもと過ごすゆっくりな時間を意味づけることが難しい。意味が感じられなければ、子ども過ごすことはイライラするだけの難行苦行になる。子どもは自分が親の人生を邪魔するお荷物のように感じても不思議ではない。

また、かつては他の家事、炊飯や洗濯など生活全般が子育てと同じ面倒さを伴うものであったが、電化製品の普及で家事の多くが楽になった。取り残された子育てがとてもしんどく感じやすい状況になったことも影響していると考えている。

②情報機器の爆発的進化による被ばく量の増大

９０年前にラジオが、６０年前にテレビが登場した。最近では、インターネット、スマホやｉパッド、ゲーム機などを乳幼児期から使わせることも珍しくない。車でぐずる子どもにＤＶＤを見せることもごく普通になった。

乳児期に機械の音や映像に大量にさらされると、本来親の声が入る脳の部位が機械に占領されてしまうのではないだろうか。これを「機械にさらわれた子ども」「機械に育てられた子」と考えている。

１９７２年に、大学で初めて出会った自閉症の子どもの姿は、発する言葉が「タケダ・タケダ・タケダ」や「ヤン坊マー坊天気予報」だけで、ひたすら走り回るばかりだった。当時はよくわからなかったが、その言葉は、夕方の食事の準備時のニュースや天気予報のコマーシャルだったのである。子どもをテレビの前に置いて食事を作っていたために、機械にさらわれてしまったと考えるようになった。

また、ある保育園でとても知的な顔だちの子どもが、机に向かって熱心に絵を描いていた。それはワーナーブラザーズのマークとアルファベットのような字であった。乳児期から早期教育として英語教材のビデオを見せていたようである。そのタイトル場面が先のマークだったのだろう。しかし、人と関わることができず、言葉は全く話せなかった。

機械に育てられた子どもは、本来仲間である人間を怖く感じ、敵とすら感じるのである。このために人との関わりが困難になる。この１０年のスマホの急速に普及したが、情

報機器の被ばく量がさらに増大し、人とのコミュニケーションが妨げられることが危惧される。

⑤ 最終的に発現の引き金を引くのは、母親の原初的な受信機能である。

上の二つの状況は，程度の差はあれどの家庭にも共通している。それにもかかわらず、発達障害と呼ばれる子どもとならない子どもがいる。この違いは、乳児期に母子間で濃密な情緒のやり取りする機能がうまく働くかどうかによると考えている。

２０年ほど前ある支援施設を見学に行った時のことである。子どもと母親が帰る場面だったが、子どもは母親の方に体を傾けて手をつないでほしい、あるいは体を触れ合いたいというサインを出していた。母親はこれに全く気付かず、手を出すこともなければ肩に手をそえることもなかったのである。

これはほんの一例であって、子どもの出すサインをうまく受け取れない場面を数多く見ることから、最近こうした母親が増えているのではないかと感じている。私たちが自然から距離を置く生活になったために、人間がもともと持っていた原初的な能力が弱くなってしまったのかもしれない。１９４０年代にアメリカやヨーロッパで自閉症が報告されてから８０年を経て、3 世代目、４世代目に入り、鼠算式に爆発的な増加につながっていると考えている。

成田は、「子育ては立派な原始人にする」ことと述べているが、親自身が原始人としての能力が十分育っていないことが、発達障害と呼ばれる子どもが増える大きな理由ではないだろうか。

子どもは、自然を内包して生まれてくる。子どもを発するメッセージを正確に受け取り応えていけば、「原始人」として育つのだが、親子ともども自然から遊離しがちな生活環境がそれを難しくしているのである。この先、メタバースと呼ばれるコンピューター内の仮想空間や生成 AI やチャット GPT などの人工知能を組み込んだロボットの出現が、これをさらに促進するだろう。

４．親の仕事は『心のおむつ替え』という作業

子どもは朝から晩まで起きている間、話し続ける。その理由は、感覚や感性の裏付けを求めるからである。自分が感じたことを周囲の大人に受けとめられ肯定されることで、「感じたことは間違っていなかった、自分の感覚はあてになる」という自信が生まれる。

これが、私が「心のアンテナ」と呼ぶ「感性への自信」であり、膨大な情報や物があふれる世界を生きてゆくためには、必須の能力なのである。この力は、大人から関心を持って受けとめてもらわないと育たない。親であるということは、「情緒を共有しながら子どもの表現をくみ取る営み」と考えている。

子どもが絶えず話をするのは、「感性の自信」を得るためばかりではない。小さい頃は、おしっこやうんちをするとおしめを替えなければならないが、同時に言葉が出る以前から、心の片づけの手伝いや「心の廃棄物」を汲み出すことが親の仕事なのである。『心のおむつ替え』と言ってもいいだろう。

うれしいことは親と共有することで喜びをふくらませ、さらに「楽しい部屋」に大切にしまう。苦しいことや悲しいことは、話したり泣いてあやしてもらうことで、心を痛

める「とげ」を取り除いて、「苦しい部屋」や「悲しい部屋」にしまい、辛さを和らげるのである。そして、心に置いておく必要のないものは、廃棄物として排出するのを手伝うのである。

「心のおむつ替え」が丁寧になされると、うれしさや悲しさ、怒り、辛さなどいろんな感情が独立したものとして保存され、心の幅が広がり奥行きを増す。心の部屋が片づいており余裕があるので、現実に起こる様々な事態に柔軟に対処でき、辛い場面や苦しい場面でやけを起こしにくくなる。これが心が豊かになることであろう。

他方、心のおむつ替えが丁寧に行われないと、うれしいことも悲しいこと辛いことも、心の中でまざり合った状態で存在することになる。子どもは自分が今どんなことを感じているのかはっきりしないので、感情表現がうまくできなくなり、落ち着きがなく、行動が場当たり的になる。またわずかに残された心のすき間で、現実に起こる事態に対処しなければならないので、うまく対応できない。

心の中でいろいろな感情が不消化なまま長時間おいておかれると、どす黒い状態で渦巻くことになる。心の中が『うんこまみれ・しっこまみれ』になり、さらに腐敗すらしていると言ってもいい。ストレスがかかるとこれが一気に噴き出し、「馬鹿、ボケ、死ね」など激しい言葉や、殴る蹴るなどの暴力的な行動として現れる。これが、「発達障害」と呼ばれるものの正体なのである。

いったん噴出すると、下痢や嘔吐のように自分で制御できない。心の廃棄物を出すこと自体は健康を維持するために必要だが、せっかくの貴重な体験が記憶としてとどめられず、心の栄養にもならないので心が育たないのである。また、周りがこうむる迷惑は計り知れない。

心のおむつ替えを親や周りの大人が丁寧にしてくれることで、心が片付くだけでなく、情緒を共有しながら人の話を聞く力が育つ。質の良いコミュニケーションや言葉が通じ合うためには、その底流に感情や情緒の分かち合いがなければ成り立たないのである。発達障害と呼ばれるものは、人と気持ちを分かち合うことができないことがその核心であり、不都合を生み出す根源なのである。

５．変化がわかる簡単な方法

愛着が十分に形成されているか、機械にさらわれた子どもがどのぐらいに人間の世界に戻ってきているかを判断する簡単な方法を紹介したい。それは人物像を書いてもらうことである。

子どもは１歳半ぐらいから殴り書きするようなるが、３歳ぐらいになると円が描けるようになり、そこに小さい円が二つ描かれるようになる。人間の出現である。しばらくたつと目の部分に瞳とおぼしきものが加わる。画竜点睛というが、瞳が描かれた時に魂が入るのである。これは「私は人間の世界で生きていきます。よろしく」と宣言しているようなものだと考えている。

発達障害と呼ばれる子どもは、その程度によるがまず人間が書けない。車や電車、昆虫、アンパンマンやピカチュウ、トーマスはとてもうまく描けたりするのにである。程度が軽いと、顔が描けても目が抜けている、目が描けが瞳が描かれていないことがある。顔に目鼻口がないのに、手足は詳しく描かれていたりすることもある。

瞳については私なりの仮説がある。授乳するとき子どもはまんじりともせずに母親の目を見つめている。その時何十回何百回とまなざしが交わされ、「お母さんといると安心する、うれしい」という感覚を母親との間で分かち合うのである。この濃密なやり取りがあって初めて、子どもの心が育ち人間になるのである。

哺乳は単なる栄養補給以上の情緒を交流するという大きな意味を持つ時間なのである。心をやり取りし、分かちあっているのである。母親が栄養補給とだけ考えると、授乳しながらスマホでメールやゲームをしたり、韓ドラを見たりする。瞳を介しての情緒のやり取りが行われず、結果的に瞳が描かれなくなるのではないだろうか。

その弊害は計り知れないのである。発達障害とよばれるものの本質は、「人と情緒を分かち合えない」と述べたが、それは授乳の時の母子関係にまでさかのぼるのである。

６．原因論が変わると、援助の方法が変わる

私が強調したいのは、いま私たちが「発達障害」と呼んでいるものの正体は、その多くが「愛着形成不全（愛着障害）」と考えられるということである。私が原因論にこだわるのは、援助の方法が大きく変わるからである。

療育場面で言えば、脳機能説では子どもがトレーニングを受け、親はその間、別室で待っていることが多い。もし「愛着形成不全」ということになれば、母子関係の充実を図るために同席でのカウンセリングやプレイセラピーという形に変わるだろう。このためには予算や人員も大幅に組み替えが必要になるが。

もう一つは、岡田氏が述べているように、先天的障害や特性であれば予防することはできないが、愛着形成不全であれば発現を防ぐ可能性が出てくる。生後すぐから乳幼児期、ことに１歳ぐらいまで、授乳場面やあやしているときに母子間の情緒のやり取りが適切に行われているかに焦点を当てた援助をするのである。

母親の心のスピードが子育てに適当なほどにゆっくりしているか、母親がイライラしていないか、子どもが出しているメッセージを的確に受け止めているかが援助の焦点になる。テレビやスマホなどの情機機器の被ばくも気を付けたい点である。

しかし、この援助は高度の能力を必要とする。微細な情緒のずれを見抜く力が必要だからである。ただ、情緒のやり取りは感性のレベルであり、ずれがあったとしても知的に伝えることで理解したり修正することが難しい。このため援助は、容易なものではないのである。

３番目の理由は、保育や学校現場の混乱を減らす可能性があることである。急激な数の増加もさることながら、脳機能からの説明が、混乱に拍車をかけているように思う。

発達障害的な特徴を示す子どもについて、子どもの話を十分に聴かないなど親子関係に気がかりを感じている保育士や教員は少なくないだろう。親子関係が関与しているのではと感じても、病院を受診して発達障害と診断されると、育て方は一切関係ないことになり、それに触れることはタブーにさえなってしまう。

教師や保育者が現場で感じているのは、「愛着形成不全」で説明される現象だが、学校では先天的脳機能障害説以外が許されないために身動きが取れなくなり、医療に丸投げするしかなくなるのではないだろうか。

発達障害が、先天性の脳機能の障害であれば、素人である我々には手も足もでない。発達

記　念　講　演

障害の子どもを育てるのは、同時に何人も育てるぐらい大変なことである。私たちができるのは、母親の負担を軽くすることを手伝ったり、一時的に子どものお世話をするぐらいしかできない。

これが「愛着形成不全」となると状況は違ってくる。感情のやり取りのずれは、私たちの日常の感覚で十分に理解可能な現象として浮かび上がってくる。授乳やあやし方、子どものサインの読み取り方、声の掛け方など、子育てをした人にとってはおなじみのことであり、親子の情緒のやり取りが噛み合うように援助することになる。

それにしても、発達障害とよばれているものの多くが「愛着形成不全」であるとすれば、科学の最先端を走る医学がどうして脳の障害とする間違いを犯したのか、これ自体が興味深いテーマである。今回の話が、「定説」を一度横において、自分自身が見聞きし感じたことから、発達障害を見直す機会になれば幸いである。

素晴らしいご講演をいただきました。ありがとうございました。今後のご活躍を心からお祈りいたします。

会　長　表　彰

令和5年度、会長表彰が、総会に先立ち発表されました。

表彰者の皆さん

受賞者

愛知県　後藤　冷子　様

鳥取県　井上　廉女　様

広島県　長島　佐加美　様

高知県　志手　清晴　様

香川県　大山　扶美代　様

徳島県　殿川　一夫　様

岩手県　三浦　律子　様

おめでとうございます。

全体研修
プレイバックシアター即興劇講演

演者：プレイバッカーズ

自己開示を通して、心の交流と自立への道程を・・・」

プレイバックシアターは、ニューヨークで生まれた台本なしの即興劇です。 1975年にジョナサン・フォックスの手により誕生しました。ルーツをたどってみると、驚くことに文字を持つ文明よりも、もっと古い時代にさかのぼります。

では、当時、人々にとってこの即興劇の持つ意味はどれほどのものだったでしょうか？

それは、文字の力をおぎなう分も含めて、人々の生活の中であらゆる場面に登場してきたようです。

たとえば、宗教的儀式であったり、情報交換、エンターテイメント、また、教育もこの即興劇を通じて行われています。さらに、人々の周りに起こる喜びや感動を分かち合ったり、悲しみや困難を慰めあったり、あるいは戦いに向けて士気を高めたりするなど、実にさまざまな役割を担ってきました。

台本があるなしに関わらず、現代演劇のルーツは古代の即興劇の営みにありますが、共通して言えるのは、そこに人が集い、アクターも観客もその場を共有するすべての人たちが劇に参加し、作っているということです。 決して一方的ではなく、 全員の参加によって成り立っているのです。 中でも即興劇は、他 のどの劇と比べてみても、観客の持つエネルギーが舞台に反映されます。皆様のエネルギーを原動力に進んでいきます。実にダイナミックな演劇なのです。

退任・就任　あいさつ

今回の総会で退任された峠テル子前会長と

新しく就任された香川 勝新会長にご挨拶をいただきました。

峠テル子　前会長

令和元年度から4年の間、全日本青少年育成アドバイザー連合会会長を務めさせて頂きました。

5年度の香川 勝会長に引き継ぐことが出来ましたのも皆様方のご協力とご支援のお陰と改めて感謝申し申し上げます。

会長職の内3年間は新型コロナウイルス感染症禍下でした。各県アド会とも役員会や行事など規模を縮小してでも全日本アド連活動を停滞させなかったこと（各県アド会）に対し敬服致しております。

最近、新型コロナの5類移行に伴い通常のアド会活動を実践できることを、とても有難く感じています。

外出自粛のこの任期中、全国アド連の各県に依頼して「実態調査2021」を実施しその結果をクロス集計とセットで2022年に各県へ郵送致しました。「自分の県の活動の実態だけでなく他の県の活動内容が分かりそれによって、自分の県では出来ないと諦めていた活動も出来そう！」との複数のお声を頂きました。

実態紙上調査の結果を受けて、更に現場のお声を聴収してお互いに理解できることも多くあるのではと感じました。今後、私は各県を訪問し、コロナ禍下で停滞していたアド連活動の活性化のために顧問として微力を尽くしたいと思っています。各県の会長様、どうぞお声掛けして下さい。

私は足掛け約40年青少年健全育成活動に携わって参りました。その経験から、青少年育成活動とともに、胎児から3才頃までの乳幼児期にかけて、精一杯の愛情のこもった対応が、子どもを育む親の最大の務めだと痛感しました。

令和5年度の総会が四国の丸亀市で開催され、その時の「香川大学元教授 小柳晴生先生の講演内容に深く共鳴し早速、小柳先生の御指導の下に紙芝居『お母さん、もっと私の心の声を聞いて』を作成しました。訪問の折には、「実態調査2021」と、この紙芝居も持参致しますのでどうぞ宜しくお願い致します。

香川　勝　新会長

会長の香川県の香川勝です。

昨年生まれた子どもの数が80万人を下回り、過去最少となりました。さらに、時代の変化とともに、国では法律改正により「こどもまんなか社会の実現」を目指し「こども家庭庁」が発足し、青少年の権利を保障することが社会全体で必要となりました。青少年は次代の担い手です。同時に青少年期は人格の基礎を形成する大切な時期です。現在、少子高齢化、情報化、国際化等の社会の変化と社会的自立の遅れや非行等青少年をめぐる今日的課題は深刻です。そこで子育てにおける家庭の役割の重要性を踏まえつつ、青少年の育成にかかる基本理念と施策の方向性を明確に示し、青少年が自立した個人としてひとしく健やかに成長することのできる社会の実現を目指します。全日本青少年育成アドバイザー連合会は、幅広い分野にわたる青少年育成施策を総合的かつ効果的に推進するため、活動を推進します。

国会ではLGBT法案が可決されました。多様な社会を実現し、ますます深刻になる青少年問題を解決していくために、会員一同と共に邁進していく覚悟です。今こそ、我々アドバイザーが結束し青少年問題の解決に当たっていきたいと思います。

結びに、当アドバイザー連合会では、青少年問題のエキスパートを養成する講座を開設しています。是非、ご参加下さい。

今後の、皆様のご健康・ご活躍を心からお祈りし、ご挨拶といたします。ありがとうございました。